

記述が不十分な小学校社会科教科書を補う教材研究とは — 小学校第 6 学年の歴史教材を例に —

- What Kind of Teaching Materials will Complete the Textbook which is not Fully Described?
— A case Study of 6th Grade Social Studies Text Book —

瀬戸 健¹ 水上 義行²
SETO Ken MIZUKAMI Yoshiyuki

小学校社会科では、指導が難しい内容がいくつか入っているが、特に第 6 学年の歴史教材では、社会科を得意とする教員でも時に教科書に掲載されている記述や資料だけでは意味がわからないものが含まれている。小論ではその中から、教科書に掲載されている①承久の乱の折に北条政子が御家人に語った言葉、②元寇の学習で使われている蒙古襲来絵詞の場面の入れ替え、③自由民権運動の状況を示す版画を例として取り上げ、わかるようにするには新たにどのような資料が必要になるのかについて検討した。その結果、①では源頼朝が行った幕府による地頭の追認を、②では蒙古襲来絵詞からの場面の追加を、③では、集会条例の条文を加えることが有効であることを述べた。

キーワード： 小学校社会科、歴史教材、承久の乱、蒙古襲来絵詞、自由民権運動

I 問題の所在

小学校社会科では、指導が難しい内容がいくつか入っているが、特に第 6 学年の歴史教材では、社会科を得意とする教員でも時に教科書に掲載されている記述や資料だけでは意味がわからないものが含まれている。また、小学校では、一人の教員が全ての教科領域を指導することから、教員一人一人が必ずしも小学校社会科歴史に詳しいとは限らないという事情もある。もし、教員が、何をどのように教えたらいいいかわからない教科書の記述に出会ったとき、どのように授業を進めるのであろうか。

このような場合、例えば、児童に教科書を読ませる、感じたことを話し合わせる、分からないところを調べさせるなどのことが考えられる。しかし、それは教員の「逃げ」や「ごまかし」であって、必ずしも質の高い授業にはならない可能性がある。

そこで小論では、第 6 学年社会科の内容の中から、何を教えたらいいいかわかりにくいものを

¹ 上越教育大学教職大学院

取り上げ、どのような補助教材を準備すればよいのか、教材研究の方法について検討してみたい。

取り上げる内容は3つである。1つは鎌倉時代の承久の乱に際して、北条政子が御家人たちに語った言葉であり、2つ目は、蒙古襲来絵詞の中に出てくる竹崎季長と安達泰盛とやりとりであり、3つ目は、自由民権運動の様子を表した新聞の版画の取り扱いである。

なお、取り上げる教科書は、全国で最も採択率の高いと言われている東京書籍の『新編 新しい社会6上』（平成26年4月4日検定済）とする。

II 教科書だけでは分からない歴史事象について

1 北条政子の言葉が意味するもの

北条政子が掲載されているところは、「頼朝が東国を治める」という表題がついた pp52～53 の2ページの後半部分である。この2ページの中の記述では、特に「ご恩と奉公」が太字にされているので、幕府と御家人とがご恩と奉公でつながる関係であることを学ばせるという意図があるのであろう。また、承久の乱は、幕府と御家人とのつながりが大きな力を発揮して短期間に朝廷方を打ち破るとともに、武勲を立てた者は西国の守護、地頭などとして取り立てられ、新たな領地が与えられるという一連の「ご恩と奉公」の関係が守られた典型的な例でもある。鎌倉幕府の力が西国にも及ぶという歴史的な事実もここで示そうとしているのであろう。

では、北条政子は、なぜここに登場しているのであろうか。教科書 p53 の北条政子のコラムには、政子の像とともに次のような記述がなされている。（下線及び番号は筆者）

① 頼朝のご恩と政子のうったえ

— 承久の乱 —

朝廷から、幕府をたおせという命令が鎌倉武士たちに伝えられました。頼朝の妻・政子は、おどろいて集まってきた武士たちに、頼朝のご恩を説きました。

「頼朝どのが平氏をほろぼして②幕府を開いてから、そのご恩は、山よりも高く、海よりも深いほどです。ご恩に感じて名誉を大切にする武士ならば、④よからぬ者をうちとり、幕府を守ってくれるにちがいありません。」

このように頼朝のご恩を説いて、武士の団結を訴えました。武士たちは、奉公をちかい、京都に攻め上りました。

このコラムには、①「頼朝のご恩」という表題がついている。わざわざ「頼朝」と書いたところに特別な意図を読み取ることができる。征夷大將軍になった頼朝がもっていた政治感覚の鋭さが、御家人たちの結集力を生み出したことをここでは学ばせたいのではないか。しかし、その施策の具体については②にあるように「そのご恩は、山よりも高く、海よりも深い」と抽象的な表現となっている。

この頼朝のすぐれた政治感覚を理解するには、平安時代の武士の生活と、鎌倉幕府成立以降の武士の生活の比較による教材研究が欠かせない。注目したいのが地頭である。地頭は鎌倉時代に

なって新たに置かれた役職ではない。平安時代に各地に作られた荘園の管理や徴税を担う役職として、都に住む荘園領主たちが、荘園がある地域に住む武士たちの中から任命したものである。武士にとって荘園内の税を扱う地頭の職は、収入の多い魅力ある仕事だったに違いない。しかし、荘園領主と地頭の関係は必ずしも良好ではなかった。例えば地頭には、税として集めた米などを荘園領主に送る役割もあったが、その多寡をめぐる両者の争いが多かったという。その結果、地頭は荘園領主から簡単に罷免されることも少なくなかった。

頼朝が、権力を握ってすぐに行った施策に、守護、地頭を全国に置くというものがある。この場合、幕府がこれまでの地頭とはちがう新たな御家人を、地方に派遣して地頭として任命したのではない。これまでの地頭を、幕府が追認する形で地頭に任じたのである。このような簡単な手続きによって、武士にとって地頭の職は安定したものとなった。つまり、荘園領主とのトラブルが発生した際、例えば荘園領主が地頭を罷免しようとしても、地頭は「私は、あなたの地頭でもあるが幕府に任命された地頭でもある。あなたが私を罷免しようとしても幕府が許さない」などと居直ることができるようになったのである。つまり荘園は、事実上、荘園領主への貢納をやめ、幕府が任命した地頭のものになっていく。それは、貴族や寺社の勢力を削ぎ、代わって武士たちにとって安定した生活が保障されることになったということである。

北条政子が頼朝のご恩が「山よりも高く、海よりも深い」といったのは、頼朝の施策によって武士たちの地位が経済的、社会的に高くなったことを表しているのだろう。そして③ご恩に感じて名誉を大切にす武士とは、その頼朝によって与えられた経済的、社会的地位を、幕府を守ることによって存続させようとする武士のことであろう。また、④よからぬ者とは、幕府の存続・発展を妨害しようとする者であり、朝廷を中心とした勢力を指している。

政子が話したことは、おそらく、「あなたたちは、あのみじめだった平安時代に戻りたいのか」と言ったように御家人たちには聞こえたであろう。その結果、北条時房、北条泰時、北条朝時、武田信光らに率いられた約20万の武士たちは、政子が話をしてわずか3日後の5月22日には鎌倉を出発し、いわゆる東海道、中山道、北陸道の三方に分かれて西に向かい、6月15日には京都に到達している。わずか3週間あまりの短期間で都の朝廷方を攻め、制圧したことは、政子の言葉がいかに武士たちの心に響いたかを表していると言えよう。

先にも述べたように、政子の短い言葉を通して、ごく簡単な手続きで武士たちの生活を安定させた頼朝の政治感覚の鋭さを、ここでは是非学ばせたい。そのためには、単に教科書の資料を使って説明しているだけでは、児童に伝わらないのではないだろうか。

2 蒙古襲来絵詞からみる鎌倉幕府

勢力を拡大し、西国にまで鎌倉幕府の影響を及ぼす原因になった承久の乱が、ご恩と奉公という将軍と御家人との関係が有効に機能した事例であるとする、元寇は、ご恩と奉公が機能せず鎌倉幕府の力が衰える契機となった事件としてとらえることができる。しかし、教科書に資料として掲載されている蒙古襲来絵詞から引用された絵は、教科書 pp54~55 に4つあるが、必ずしも絵巻物のストーリーにしたがっているわけではない。ここでは、どのように違っているのかを検討しながら、教師は何をどのように指導したらよいかを考えてみたい。

教科書 pp54~55 には、わずか2ページに9つもの資料が掲載されている。そのうち、竹崎季

長の活躍や動きがわかる蒙古襲来絵詞から転載された場面は4つ、残りの5つは、「北条時宗の画像」、「元の勢力図」、「2回に及ぶ元軍の進路図」、「博多湾沿いに現存する防塁の写真」、「鷹島神崎遺跡で見つかった元軍の船体の一部を示す水中写真」である。

この中で最も気になるのは、竹崎季長が幕府のご恩奉行である安達泰盛に向かって、恩賞の交渉をしている場面である。そして、それに合わせて教科書の記述には、「しかし、幕府は、活やくした武士たちに新しい領地を与えることができませんでした。また、武士たちは、役目を果たすための負担に苦しみ、生活に困る者もいて、幕府に不満をもつようになりました。このことから、ご恩と奉公で結びついていた幕府と武士の関係がくずれていきました。」となっている。この記述とこの絵を対比させることによって、このページでは、竹崎季長は幕府に対して恩賞に関する苦情を言った武士の例として紹介されていると教師や児童に受けとられる可能性が高い。しかし、蒙古襲来絵詞を再度確かめてみると、それは間違いであることが分かる。資料としてここにこの絵を掲載することに問題はないのだろうか。

教科書に取り上げられている4つの場面を蒙古襲来絵詞に描かれている順に並べてみる。すると竹崎季長が安達泰盛と話している場面は、最後の方ではなく2番目に入る。では、ストーリーに沿って説明を加えてみる。

蒙古襲来絵詞に最も早く登場するのは、竹崎季長が元軍に一騎で突撃を敢行し奮戦した右の絵である。なぜ、一騎なのかというと、大きな恩賞を得ようと考えたからである。この突撃を敢行する前に季長は、戦（いくさ）奉行である太宰少式に出会い、太宰の軍に入らないかと誘われた。しかしそれでは恩賞が少なくなると考えた季長は、その申し出を断っている。結果として季長は一騎だけの突撃

図版については、下記の教科用図書を参照ください。
『新編 新しい社会6上』p54
東京書籍 平成27年2月10日発行

(絵図1) 元軍を相手に奮戦する竹崎季長

を試みることになるのだが、奮戦むなしく大けがをし、先に断った太宰軍に助けられて、かろう

図版については、下記の教科用図書を参照ください。

『新編 新しい社会6上』p55
東京書籍 平成27年2月10日発行

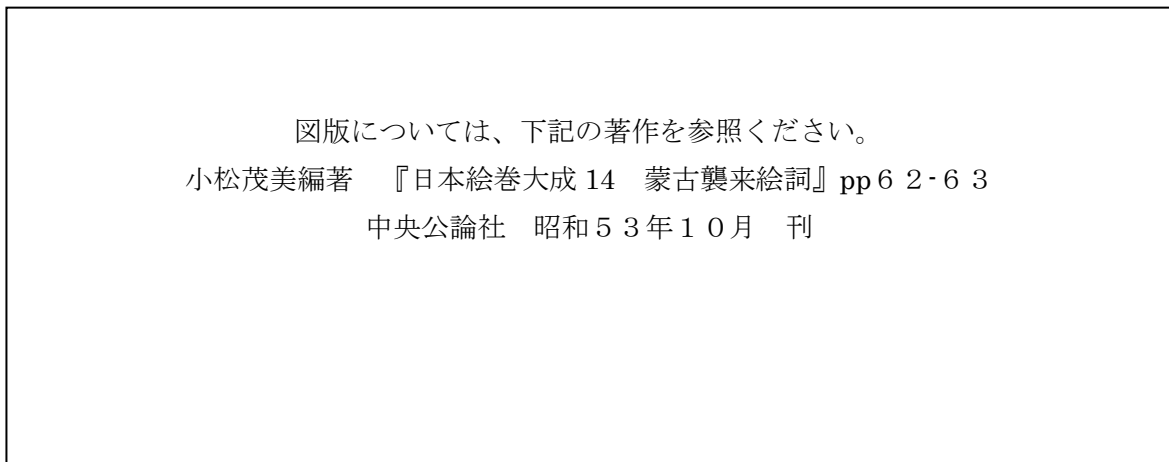
じて一命をとりとめるという無様な姿をさらすこととなった。2年ほど静養し元気を取り戻した季長は、待っても恩賞の沙汰がないので、自分の財産を売り払い鎌倉への路銀をつくった。

左の絵が、竹崎季長(右)とご恩奉行の安達泰盛(左)との話し合いの様子である。大けがをただけでほとんど軍功のなかった竹崎であるが、

(絵図2) 安達泰盛と話す竹崎季長

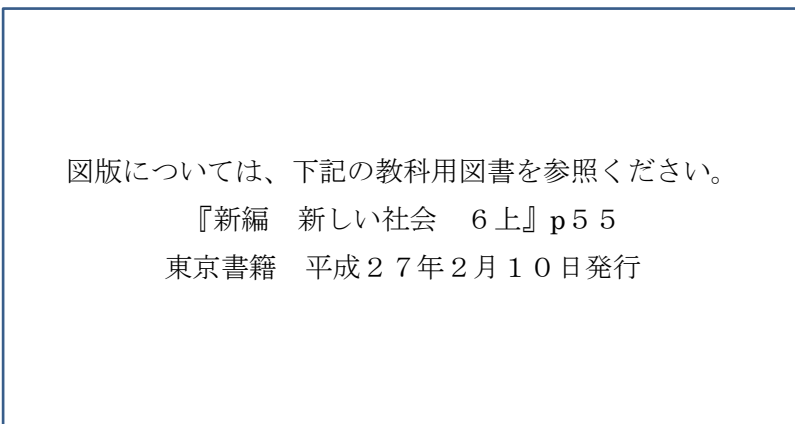
なぜ鎌倉までご恩奉行に会いに行ったのであろうか。

当時、恩賞につながる武功として次の3つが常識だったようである。1つは、真っ先に敵陣に突っ込む「先駆け」である。2つは、敵の首級をあげる「分捕り」である。取った首が敵の中核となる武将であればあるほど、恩賞は大きくなると言える。3つは、命がけで戦って落命する「討ち死に」である。この場合は、所領安堵となり跡継ぎに家督が引き継がれることとなる。竹崎季長は、先の戦いで「先駆け」を行い、それが恩賞に値すると思ったのであろう。しかし、安達泰盛は、季長の軍功を認めなかった。季長は、「恩賞はもらえないから、自分が命をかけて先駆けしたことを将軍に伝えてほしい」という意味のことを安達に頼み、帰ろうとすると、安達泰盛は、竹崎季長の考え方や態度に心が動かされたのか、彼を地頭に任じ、駿馬を一頭与えた。季長の考え方がご恩と奉公の考え方そのものであったからであろう。それが、教科書には載っていない下記の場面である。



(絵図 3) 地頭に任じられ駿馬をもらう季長

地頭となった竹崎季長は、元が再び攻め寄せてきているという話を耳にし、今度こそ武功を立てようとしてしっかり準備して出かけていく。それが教科書に取り上げられている石塁の前を馬に乗って意気揚々と進む下記の場面である。



(絵図 4) 守りに向かう竹崎季長と武士たち

ここでは、竹崎季長の先駆けのときと、この場面とを比較させたい。地頭となった季長は、馬、鎧甲、家来の人数や持っている道具など、見違えるようになっている。また、前回の戦いで元軍の上陸を許し苦戦した幕府は、御家人たちに石高に応じた防塁の建設を命令し、元軍を海上に足止めしたまま戦うことを考えて

いた。したがって、季長の家来の中には、元の船に自分の乗った舟を接岸させるための道具を担

いでいるものも見えている。そして戦いでは、元の船に乗り込み元軍の船の舳先で相手の兵の首を取る竹崎季長の、勇敢だが戦いの恐ろしさがわかる姿が描かれている。

図版については、下記の教科用図書を参照ください。

『新編 新しい社会 6上』p55
東京書籍 平成27年2月10日発行

教科書では、このように武士たちが活躍する場面と、季長が安達泰盛と話し合う場面とを対比して、武士たちの不満を児童にとらえさせることをねらったのかも知れない。しかし、蒙古襲来絵詞に示されている場面の順番を入れ替えてまで教材化する

(絵図5) 元軍の船上で戦う竹崎季長

必要はあるのか。つまり、蒙古襲来絵詞が伝える史実と違う内容で児童に学習させていいのかという問題がある。それよりは、この蒙古襲来絵詞の最後の場面である竹崎季長と戦奉行である太宰少弐の会話を想像させ、竹崎季長の心の中に起こる期待と、現実との落差を教材にするのがいいのではないか。

例えば次ページに示す絵は、教科書には載っていないが、戦いを終えて竹崎季長と太宰少弐とが話している場面である。二人の間には、分取りした首が2つ、また執筆という名の記録係も座って記録をとっている。吹き出し等を使えば、季長が心の中で思っている恩賞への期待を児童は書くであろう。しかし、元寇を終えての恩賞は、軍功に対して分け与える土地が非常に少なく、くじ引きとなったと言われている。

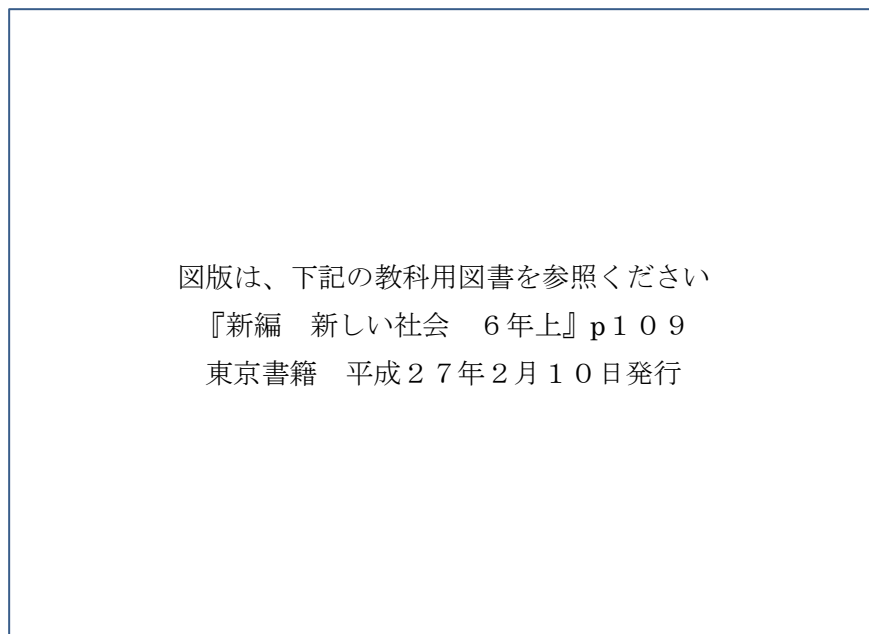
図版は、下記の著作を参照ください
小松茂美編著『日本絵巻大成14 蒙古襲来絵詞』
pp114-115
中央公論社 昭和53年10月 刊

くじ引きのために分割した土地は、自分の領地にするにはあまりに狭く、落胆した武士たちは近くの神社にその土地を寄進して故郷に帰ったと言われている。この期待と現実の落差を児童が知ること、將軍と武士たちのご恩と奉公の関係は、冷めていったことが容易に予想できるであろう。

(絵図6) 戦いを終えて寛ぐ竹崎季長

3 自由民権運動を示す版画から

次ページの絵は、明治 20 年代初頭に新聞に掲載された自由民権運動の演説会の様子である。教科書 p109 には、この絵が掲載され、「演説の中止を求める警察官」という表題と、「自由民権運動の盛り上がりに対して、政府は、さまざまな形でおさえつけようとした」というキャプションがついている。



(絵図 7) 演説の中止を求める警察官

この絵は、教材としては弱点がある。絵の上部には、投げられた湯飲み茶碗や土瓶が描かれているのだが、教科書のスペースの関係から切り落とされたのか、残念ながら完璧な形としては描かれていない。実は、この教材を使って自由民権運動を児童に考えさせようとするとき、この土瓶や茶碗がだれによって、だれに向かって投げられたのかを明らかにすることは、非常に大切なポイントとなる。

民衆が自由民権運動を支持していたのか国の政策を支持していたのかが分かるからである。

そこで、第 6 学年の児童や職員室にいる教員に、「この土瓶や茶碗は、だれがだれに向かって投げたのだろう」と尋ねてみた。すると驚いたことにだれに向かって投げられたのかについては、警察官と演説を行っている弁士とで、ほぼ半々に分かれた。しかし、この絵には、どれが正しいのか、根拠となるものは何も書かれていない。

もしもこの茶碗などが、民衆から弁士に向かって投げられたとすれば、人々は口々に「くだらないことを言うな」や「ふざけるな」など弁士の演説を止めさせようと大声を出していることが予想される。

そうではなく、民衆から警察官に向かって投げられたとすれば、演説を止めさせようとする警察官に向かって、「おれたちは話を聞きに来たんだ」や「ちゃんと終わりまで聞かせろ」、「警察は引っ込め」など、演説を続けさせようとする声が聞こえるであろう。

つまり、土瓶や茶碗の行方によって民衆が自由民権運動をどのように感じていたかが明らかになるということである。そこで、だれがだれに向かって物を投げたのかを明らかにする資料を紹介したい。それは、明治 13 年に交付された「集会条例」である。下記に幾つかの条文を示した。

第一条 政治ニ関スル事項ヲ講談論議スル為メ公衆ヲ集メルモノハ开会三日前ニ講談論議ノ事項講談論議スル人ノ姓名住所会同ノ場所年月日ヲ詳記シ其会主又ハ会長幹事等

ヨリ管轄警察署ニ届出テ其認可ヲ受クヘシ

第四条 管轄警察署ハ第一条第二条第三条ノ届出ニ於テ国安ニ妨害アリト認ムルトキハ之ヲ認可セサルヘシ

第五条 警察署ヨリ正服ヲ着シタル警察官ヲ会場ニ派遣シ其認可ノ証ヲ検査シ会場ヲ監視スルコトアルヘシ

第六条 派出ノ警察官ハ認可ノ証ヲ開示セサルトキ講談論議ノ届出ニ掲ケサル事項ニ亙ルトキ又ハ罪戾ニ教唆誘導スルノ意ヲ含ミ又ハ安寧ニ妨害アリト認ムルトキ及ヒ集会ニ臨ムヲ得サル者ニ退去ヲ命シテ之ニ従ハサルトキハ全会ヲ解散シサムヘシ

第七条 政治ニ関スル事項ヲ講談論議スル集会ニ陸海軍人常備予備後備ノ名籍ニアル者警察官官立公立私立学校ノ教員生徒農業工芸ノ見習生ハ之ニ臨会シ又ハ其社ニ加入スルコトヲ得ス

これによると政治的な講演会を開催するには、開催日の三日前までに講演者の氏名、住所、会場、開催年月日を詳しく書き、主催する会の会長、幹事等より所轄警察署に届けを出し、その認可を得る(第一条)ことになっている。また、その届出において国安に妨害(支障)があると認められるときは、この講演会の開催を認可しないことがある(第四条)とし、さらに講演会当日は、警察署から正服(制服)を着た警察官を会場に派遣し、その認可証を検査し会場を監視することがある(第五条)こと、派出の警察官は認可証を主催者が見せないとき、講演会の届けに書いてない内容に話が及ぶとき、また人に悪いことをするようにそそのかしたりほめかしたりする意図が含まれていて、国の安定に支障があると認められるとき、及び集会に参加できない者に対して退去の命令をしても従わない者がいるときは、講演会全体を解散させなければならない(第六条)ことが書かれている。

加えて、政治に関する講演会には、陸海軍人(予備役等に含まれる者も)、警察官、国立・公立・私立学校の教員・生徒・農業・工芸の見習い生は、参加したり主催する会に加入したりすることはできないことにもなっている。

そこで、集会条例に書かれていることを踏まえ、新聞に掲載された版面を再度詳しく見てみることにする。まず、弁士の周りに制服を着た3人の警察官が立っている。この3人は、この講演会に警察署から派遣され、認可証を検査したあとステージに残り、椅子に座って監視していたのだろう。弁士の話の内容が、警察に届出した範囲をこえて熱を帯びてきたときには、警察官は立ち上がって拳を振り上げ、弁士の話を止めさせようとしている。「やめい、やめんか」などという警察官の声が聞こえてきそうである。もちろん講演会は解散である。

一方、民衆は弁士の話を「そうだ、そうだ」と思いながら聞いていたので、突然の警察官の乱入に腹を立て、警察官に物を投げたり罵倒したりしている。投げられた土瓶や茶碗は、民衆(聴衆)が警察官に向かって投げたのであり、興奮している会場の様子が伝わってくる。なお、なぜ湯飲み茶碗がここにあるのかも考えておきたい。会場は、おそらく現在の公民館のような施設の屋内であり、そこに安物の茶碗などが常備されていたのだろう。主催者はそれに茶などを注いで、民衆に出していたのだろう。

屋内で講演会をすることにも意味がある。政府を批判する自由民権運動の火の手が全国に広がることは、政府が最も避けたいところである。だから軍人や警察官、教員、生徒等には講演会に

参加させないように隔離している。屋内であれば、だれが会場に入っているか、何人いるかが明確であり、行きずりの人々が集まってきて人数が膨らむことも防ぐことができる。湯飲み茶碗は、まさにその場にたくさんそろえられていて、民衆が手にしている器なのである。

このように、版画一枚では、その絵の中で起こっていることの事情がわからない。児童に、より正確に歴史的事象を理解させるには、資料としての版画だけでなく、それを補う集会手条例の条文のような別の資料、を見付け児童に示す必要があると言えよう。

授業では、この版画で示された状況をロール・プレイで再現し、児童がそれをもとに考えるという飛び込み授業を企画してみた。担任教師を弁士に、飛び込み授業をした筆者が警察官に、そして児童が民衆である。指導略案は、次ページに示した。

III まとめ

すでに述べたように、教科書に掲載された一枚の写真や絵、1つの言葉だけを資料として示しても児童がその状況を想像し、理解することは簡単なことではない。そこで、承久の乱では、北条政子の言葉を理解するのに、平安時代と鎌倉時代の地頭の地位を比較する活動を組み込み、源頼朝の政策によっていかに御家人たちが力をもったかを考えてみた。また、蒙古襲来絵詞では、教科書に掲載された場面だけでなく、それ以外の場面も教師が補ってそこに登場する竹崎季長の生き方や恩賞に対する期待をとらえられるようにした。元寇が終わったあと、季長の期待は裏切られていくのだが、そのことによって児童は、ご恩と奉公の関係が崩れていくのを感じることができるようになったであろう。

自由民権運動の学習でも、新聞に掲載された一枚の版画だけでその場の事情を理解することは児童だけでなく、大人でも難しいことである。そこで集会条例を補助資料とすることで、なぜそこに警察官がいたのか、弁士は何を語っていたか、民衆はどちらの考えに共鳴していたかを明らかにすることができる。また、ロール・プレイを取り入れることで、もしかしたら本当にそのような場面が明治時代にはあったかもしれないと児童は感じ、臨場感をもってその歴史的事象をとらえるようになるであろう。

もちろん、自由民権運動の一場面だけでは、深い理解には届かない。明治維新に新政府が誓った五箇条のご誓文の精神も、自由民権運動につながっている。だから、ロール・プレイでは、担任教師が演じる弁士の口から、「天皇は、みんなの意見を聞いて国の行く先を決めるといったではないか」などの言葉が出てきている。また、児童はロール・プレイに先だって、弁士がどのような言葉で警察官に反論すればよいかも書いた。そして、弁士役の担任教師にそれを託している。弁士の言葉は、民衆としての児童の心をも表現したのである。授業が終わったあと、ある女の子は「教科書の自由民権運動をしている弁士は、ひげやかみの毛ものびてこわそうだけれど、先生がした弁士は、いろいろなことを人々のために考えていて、やさしいと思った。」と書いた。教科書に書いてあることを淡々と児童に説明する歴史学習から脱却し、まるで当時の人が今生きているかのような楽しい歴史学習にするためには、これまで述べてきたように、まず教師自身が教科書の中で理解できない、ふしぎだなあと思うことを「なるほど」と思えるまで調べるといった十分な教材研究が欠かせないと思う。その教材研究が、「子どもたちにも知ってほしい」という教師の意欲を引き出してくれるのではないだろうか。

第6学年社会科学学習指導本時略案

指導者 上越教育大学教職大学院 瀬戸 健

1 単元名 明治の世の中

(平成23年10月4日 群馬県桐生市立梅田南小学校で実施)

2 本時のねらい

自由民権運動の演説会の様子からそこで何が語られたのかを想像し、人々の生活と国の政策との食い違いや対立について考えることができる。

	学習活動と予想される反応	教師の支援、□資料
つかむか	<p>1 自由民権運動の様子を描いた新聞の挿絵から、弁士とそれを聞く人々、警察官の関係を予想する。</p> <p>◎ どんな人がいますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 弁士、警察官、人々 <p>◎ ここは、どんな場所ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 建物の中、外 <p>◎ 警察官は、なぜここにいるのですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 演説を辞めさせようとしている。 弁士を守っている。 <p>◎ 茶碗やどびんは、だれがだれに向かって投げられたものですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 弁士、警察官 	<p>□ 自由民権運動演説会の絵</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの中には、警察官が弁士を守っていると予想する者もあるので、それも出させて活動2につなぐ。 いくつかの補助発問によって、視点を明確にする。
んがえ	<p>2 集会条例を読み、警察官が演説会をやめさせようとしていることを確かめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>弁士と警察官とで、どのようなやりとりがなされたのだろう。</p> </div>	<p>□ 集会条例（明治13年）</p> <p style="text-align: center;">※子ども版に改作したもの</p> <ul style="list-style-type: none"> 前半は、教師が読み、読み方の例を示す。後半は、子どもたちの力で読ませるようにする。キーワードが見付けられればよしとする。
ま	<p>3 弁士と警察官とのやりとりで、弁士がどんなことを言ったか考える。</p> <p>① 弁士がどんな反論をしたか、ワークシートに書く。</p> <p>② 教師による、弁士と警察官のやりとりのロール・プレイを見る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちも民衆としてロールプレイに参加する。
め	<p>4 ロールプレイから、感じたことを発表し、明治政府がなぜ、このような政策をとったか考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 単に感想を言うだけでなく、明治政府が何を見ていたのかも考えさせて時代の様子をとらえさせる。

資料、参考文献

- ① 『新編 新しい社会6上』(平成26年4月4日検定済) 東京書籍
- ② 安田元久著 『守護と地頭』(日本歴史新書) 支文堂 1964
- ③ 小松茂美 編集・解説「蒙古襲来絵詞」『日本の絵巻』 中央公論者 1988
- ④ 古川清行監修、渡部誠著 「元寇を調べる:『蒙古襲来絵詞』がかたる鎌倉時代のすがた」『し
らべ学習に役立つ日本の歴史』小峰書店 1995